
口ポット

秋島キサト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ロボット

【著者名】

NZノード

Z8465G

【作者名】

秋島キサト

【あらすじ】

お母さんはわたしに言った。「あなたはロボットなのよ」と。その言葉に納得したわたしは、ロボットとして日々を送っていたけれど……。

ある日、お母さんにしてみた。

「お母さん、わたしつてなんなの？」

お母さんはびっくりした顔をして、どうして？と聞き返した。

「クラスのみんなが、わたしのことをおかしいって言うの。人間じゃないって。ねえ、お母さん、わたしつてなんなの？」

お母さんは急に悲しそうな顔をして、わたしを古ぼけたちやぶ台の正面に正座させた。それから、弱々しい電球の下、真面目な顔で言った。

「いい、落ち着いて聞いてね。あなたはみんなの言つ通り、人間じゃないの。機械なのよ。ロボットなの。だから、みんながそう言つのは当たり前のよ。今まで隠していてごめんなさいね」

それで、わたしは納得した。わたしがロボットなら、何も不思議なことはない。みんな当たり前のことといっただけだ。今まであまりお風呂に入らなかつたのも、わたしがロボットだからだろ？。

翌日、学校に行くと、やつぱりみんなはわたしに言った。

「きもいんだよ、この貧乏神！」

「お前なんか人間じゃねーよ、死ね！」

みんなは変なことを言つなあ、とわたしは思った。わたしはロボットなんだから、貧乏神なんかじゃないし、人間でないのは当たり前だ。それを改めて言う必要はまるでない。それに、きもい、だなんて、ロボットに対して気持ち悪いと言つのもよく解らなかつた。人間と同じ形をしているロボットの、ビニが気持ち悪いのだろう。そしてその上、死ね、だつて？生き物じやあるまいし、ロボットなら「壊れる！」が妥当だろう。みんなは日本語を間違えている。

わたしがそれらのこと指摘すると、みんなははあ？といふ顔をした。

「バカじやねーの？」

「こいつどうとう頭がイカレたか」

「もう相手にしてらんねーよ！」

その日から、みんなはわたしに話しかけなくなつた。わたしも別にみんなのことが好きではなかつたので、いつも通り毎日を過いだ。

ある日、家庭訪問があつた。担任の先生がうちに来て、家の中でお母さんと話していた。わたしの家には部屋が一つしかないのでも、仕方なくわたしはアパートの通路に出て、戸の前でそれを聞いていた。先生が言った。

「××ちゃん、最近、そのう、自分のことをロボットだと公言しているようなんですが……お母さん、何か心当たりはありますか？」

お母さんは、ふう、とため息を吐いて、ちょっと疲れたように答えた。

「心当たりも何も、あの子に事実を教えたまでです。あの子はロボットです。間違いありません」

先生はその後、困った様子であれこれ言つていたけれど、やがて時間が来て家から出てきた。帰り際、わたしが通路で見送っていると、先生は振り返つて、哀れむような目でこう言つた。

「頑張つてね」

わたしは何を頑張るのかよく分からなかつたけれど、うん、とりあえず頷いた。

わたしはロボットだつたけど、「飯は食べないといけなかつた。でも、食べるのは学校の給食だけで、家で何かを食べることはほとんどなかつた。お母さんは朝、昼、晩と食べるけど、多分それはお母さんが人間だからだろ？」お母さんは、わたしが給食の残りをこつそり持つて帰つてくると喜んだ。

ある夜、お母さんが夕食を摑つてこる横で、何もしていなかった
しまじり尋ねた。

「お母さん。わたしはロボットで、お母さんは人間。お母さんはわ
たしのお母さんなの？」

給食のレーズンパンを食べながら、お母さんは困った顔
をして、それから深くうなずいた。

「あなたを作ったのは、お母さんなの。だから、お母さんはあなた
のお母さんよ」

なるほど、とわたしは簡単に納得した。お母さんが機械をいじっ
てこるところなんて見たことがなかつたので、そんなことが出来る
んだと少し感動もした。

ある日、蛇口をひねつても水が出てこなくなつた。びりしてかと
お母さんに聞くと、

「あなたはロボットだから、水なんて必要ないのよ」
と言つた。なるほど、と思つた。

ある日、ガスコンロがつかなくなつた。びりしてかとお母さんに
聞くと、

「あなたはロボットだから、家で食事を取らないでしょ。だから、
火を使う必要はないの。お母さんも、使わないわ」
と言つた。なるほど、と思つた。お母さんは給食の残りだけを食べ
ていた。

ある日、部屋の電気がつかなくなつた。びりしてかとお母さんに
聞くと、

「あなたはロボットだから、何も見なくて平気なの。でも、手元が
暗いと宿題が出来ないでしうから、これを使おうね」
と言つて、ひらを一本ぢやぶ台に置いた。なるほど、と思つて
ひらをくの傍で宿題をした。

ある日、学校から帰つてくると、家の戸の前に黒い服を着たおじさんが一人いた。おじさんたちは、今にも壊れそうな木の戸をがんがん叩いて、家の中に向かって何か怒鳴っていた。大きくて低い声で、わたしは一瞬怖くなつたけど、ロボットであるわたしに怖いものなんて何もない、と思い、おじさんたちにどいてくださいと言つた。ひげを生やした目つきの悪いおじさんが、わたしを睨みつけると、つま先でわたしのおなかを蹴り飛ばした。わたしは薄汚い通路に吹っ飛んだ。おなかのあたりが熱くなつて、喉の奥から何かがこみ上げてくる感じがしたけれど、多分どこかしら壊れたんだろう。わたしは動けなくなつたけど、お母さんが直してくれた。そう思つて倒れたままになつていると、家の中からお母さんが飛び出してきて、おじさんたちの足下に額をこすらせて土下座した。おじさんたちはさんざんお母さんの頭を踏んづけて、何かひどい言葉を浴びせていたけれど、お母さんはひたすら地面に額をこすりつけていた。

やがて、一人のおじさんは帰つていった。お母さんはすぐに頭を上げて、まだ倒れていたわたしのところへ飛んできた。お母さん、壊れちゃつた、直して。わたしがそう言つと、お母さんは汚い地面に膝をついて、ごめんね、ごめんねとわたしに抱きついた。土で汚れたお母さんの頬に、涙の跡がくつきついた。

お母さんは、細い腕でわたしを抱えて、家の中に入つた。夕方で、部屋の中が真つ赤に染まつっていた。真つ赤な床で仰向けになつたわたしは、真つ赤に染まつたお母さんの頬を見ていた。目元だけやけに光つていた。

お母さん、これから××のこと直してあげるからね。やつ言つて、お母さんはわたしの傍に膝をついた。わたしはうなずいて、じつとお母さんの顔を見た。とても優しげに微笑んでいて、さつさまでのおじさんたちに踏まれていたお母さんの面影はなかつた。

ありがとう、お母さん。そう言つと、お母さんははつとしたように顔を逸らし、田元を押さえた。どうしたの?と訊くと、なんでも

ないのよ、と言つてまた振り向いて笑つた。

「じゃあ、目を開じていてね。お母さんが言つので、わたしは言われた通りにした。

首筋に、お母さんの両手がそつと当たられる。指先がびっくりするほど冷たくて、カサカサしていて、わたしは思わず目を開けそうになつたけれど、お母さんの言いつけを護るためにこらえた。

お母さんは、全部の指に力を入れたり抜いたり、それを何回も繰り返していた。そのたびにわたしは息が苦しくなつたけれど、お母さんはわたしを直してくれているんだと思い、我慢した。

部屋の中はとても静かで、お母さんの呼吸すら聞こえない。

不意に、指の力が今までよりずっと強くなる。わたしはすぐ苦しくなつたけれど、お母さんはわたしを直してくれているんだと思い、がまんした。親指の爪が、喉の出っ張った部分に食い込んで、痛い。わたしは口ボリトなんだから、痛みなんて感じないはずだ。だからこれは、痛みとは別の何かなんだ。わたしはそう思つてがまんした。そのうちに、目の前が真つ赤になつた。目を開じていても、夕焼けが見えるよつになつたのだ。お母さんはやつぱりわたしを直してくれているんだ。そう思つと、手足の力が抜けた。それから一言、ありがとうございますとぶやこうとしたけれど、どういつわけか声が出なかつた。

「ごめんね……」「ごめんね……」

代わりに、お母さんがそう繰り返す。わたしがお礼を言おうとしているのに、お母さんが謝るなんておかしなことだ。

そのうちその声も聞こえなくなつて、夕焼けは遠のいていった。

「母親の方は首吊り自殺ですね。娘の方は……絞殺です。母親が殺したんでしょ?」「

「借金に追われて無理心中、か……ありがちだな」

「ええ……でも変じやないですか?この子」

「何がだ？」

「抵抗した痕が、全くありませんよ……」

(後書き)

大分久々の投稿になります。これからまたちょくちょく書こうと思つてるのでもしよろしければ読んでみてください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8465g/>

ロボット

2010年10月8日14時13分発行